

Title	法を愛した法律家
Sub Title	
Author	Mcilroy, Robert
Publisher	慶應義塾大学大学院法務研究科
Publication year	2017
Jtitle	慶應法学 (Keio law journal). No.38 (2017. 9) ,p.9- 11
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	ジェラルド・マクリン教授追悼記事
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1203413X-20170911-0009

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

法を愛した法律家

マキロイロバート

マクリン先生との出会いは、ご夫婦が日本に移住した1984年であった。家族ぐるみで親しくなった切っ掛けは、若きご夫婦が、東京でハーフの子供を育ててきた体験談を聞いたかった（できればサンプルも見なかった）ことだったと思うが、私は勿論喜んで応じた。子供の国籍についてのローヤライクな話や、子供の教育についてのビジネスライクな話をしていくにつれて、親の価値観と夢、子供に託したい価値観と夢が自然に見えてくる。このようにして、マクリン先生ご夫婦に魅せられた。

マクリン先生はペンシルベニア州のフィラデルフィアに生まれ、ペンシルベニアロースクールを卒業するまでずっとフィラデルフィアで教育を受けた。因みにマクリン先生のお父さんは

ノルマンディー上陸作戦で負傷したが、帰国後はフィラデルフィアの有名企業の管理職を務めた。

マクリン先生の「学際性」と「先端性」は、ペンシルベニアロースクールでの好成績により、十分に裏付けられていると思うが、マクリン先生の「国際性」はどこから生まれたのであろうか。あるいは、そもそもマクリン先生は何故ロースクールに行ったのであろうか。マクリン先生から聞いた話に基づいてこれらの謎に迫りたい。

東京オリンピックで金メダルを取り、後にプロボクサーに転向、世界ヘビー級王者になったフィラデルフィアの英雄、ジョー・フレイジャー（故人）。マクリン先生は、大学とロースクールの在学中、フレイジャー氏が経営して

いたボクシングジムに通った。フレージャー氏から、「お前のパンチはホワイトボーイにしては強いな」という最高の褒め言葉もいただいた。

フレージャー氏はフィラデルフィア生まれではなかった。南部のシェアクロッパー農家で生まれ育ち、15歳のとき一人で北部へ向かうバスに乗り南部から脱出して、20歳で金メダルを獲得するという、勇気と冒険心と実力の持ち主で、マクリン青年との年の差は、実にたったの7歳であった。

その頃のアメ리카では、シビルライツに関する一連の法律が次第に社会に浸透し、黒人の地位が徐々に上がろうとしていた。法によって、人々を苦しませるシェアクロッピング。法によって、人々を救おうとするシビルライツ。法の理非曲直を見たマクリン青年は、たとえ学生ローンを背負ってでも、ロースクールに行きたくなった。

ロースクールを出てペンシルベニア州の司法試験に合格すると、出会ったのは、自分の183センチをはるかに上回る身長196センチの大男、フィラデルフィアを所在地とする第3巡回区合衆国控訴裁判所のレオン・ヒギンボサム判事（故人）であった。

ヒギンボサム判事の経歴は、戦後の

人権運動史の縮図であった。フィラデルフィアの近くに生まれ育ったが、最初に入学したインディアナ州の大学でセグリゲーション（人種に基づく分離）に遭遇したため、次年度からオハイオ州のセグリゲーションをしない大学に移った。その後、イエールロースクールに進み、ペンシルベニア州の司法試験に合格すると、またしても人種差別に遭い、フィラデルフィアの一流ローファームでの就職面接はすべてけんもほろろの応対であった。方針を変え、フィラデルフィア郡の一般的管轄裁判所の判事の助手（ロークラーク）、フィラデルフィア郡の地区検事補を経て、ようやく26歳でローファームに入った。もっとも、入ったと言っても、自分の名前を冠した、フィラデルフィア最初の黒人により設立されたローファームであったが。ここを基盤として、NAACPのフィラデルフィア支部長、ロースクールの講師、州の人権委員会の委員、連邦取引委員会の委員などを精力的に務め、35歳でジョンソン大統領によって地方裁判所判事に、49歳でカーター大統領によって控訴裁判所判事に任命される。

この輝かしい経歴のヒギンボサム判事は、マクリン先生をロークラークと

して雇い、マクリン先生はそこで2年半（通常の任期は1年）勤務した。若きマクリン先生にとって、ヒギンボサム判事は正にロールモデルであった。弁護士資格を確保して、ローファームに入り、社会で広く且つ精力的に活動し、我武者羅に働いて、マイホームを持ち、借金なしになる。それではじめて、金銭的なしがらみなしに、自分のライフワークとなる職業を選ぶ自由を勝ち取る。ヒギンボサム判事の場合はこれを35歳までに達成したが、マクリン先生は、より現実的な40歳までにという期限を設定した。

ヒギンボサム判事は、自分の座右の銘を次のように表現した。「ほとんどの

人に見向かれない人々を見ようとする。不幸や苦しみがあってもほとんどの人に忘れられている人々の声を聴こうとする。」マクリン先生はこの格言を実践した。戦争で多くの家庭が破壊されたベトナムの人々、教育や経済上の機会に恵まれない沖縄の人々、ニュージーランドの先住民民族マオリの人々などに絶えず目を向け、彼らの声に耳を傾け、法律家として共に改善を図る。マクリン先生がよく授業に用いた合言葉「We love the law!」には、そういう気持ちが込められていた。

Sit tibi terra levis Geralde. Semper te in memoria tenebimus.